

長岡京左京九条三坊四町跡・
淀水垂大下津町遺跡・與杼神社旧境内

2018年

公益財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

長岡京左京九条三坊四町跡・
淀水垂大下津町遺跡・與杼神社旧境内

2018年

公益財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

序 文

京都市内には、いにしへの都平安京をはじめとして、数多くの埋蔵文化財包蔵地（遺跡）が点在しています。平安京以前にさかのぼる遺跡及び平安京建都以来、今日に至るまで営々と生活が営まれ、各時代の生活跡が連綿と重なりあっています。このように地中に埋もれた埋蔵文化財（遺跡）は、過去の京都の姿をうかびあがらせてくれます。

公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所は、遺跡の発掘調査をとおして京都の歴史の解明に取り組んでいます。その調査成果を市民の皆様に広く公開し、活用していただけるよう努めていくことが責務と考えています。現地説明会の開催、写真展や遺跡めぐり、京都市考古資料館での展示公開、小中学校での出前授業、ホームページでの情報公開などを積極的に進めているところです。

このたび、橋脚補強工事に伴う長岡京跡・淀水垂大下津町遺跡・與杼神社旧境内の発掘調査について調査成果を報告いたします。本報告の内容につきましてお気づきのことがございましたら、ご教示賜りますようお願い申し上げます。

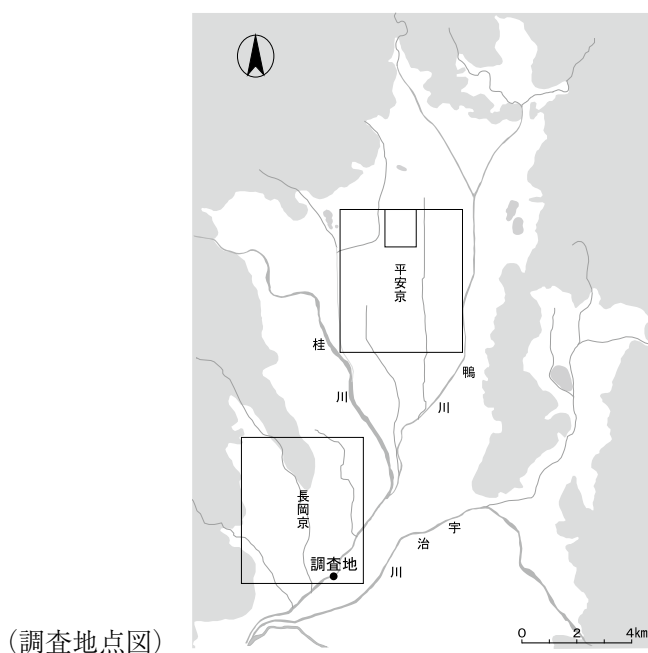
末尾になりましたが、当調査に際しまして多くのご協力とご支援を賜りました多くの関係各位に厚く感謝し、御礼を申し上げます。

平成30年3月

公益財団法人 京都市埋蔵文化財研究所
所 長 井 上 満 郎

例 言

- | | |
|----------|--|
| 1 遺 跡 名 | 長岡京跡・淀水垂大下津町遺跡・與杼神社旧境内（京都市番号 17NG338）
長岡京左京第595次調査（7AN-YMM-1） |
| 2 調査所在地 | 京都市伏見区淀水垂町地内 |
| 3 委 託 者 | 京都市 代表者 京都市長 門川大作 |
| 4 調査期間 | 2017年12月11日～2017年12月21日 |
| 5 調査面積 | 81㎡ |
| 6 調査担当者 | 金島恵一 |
| 7 使用地図 | 京都市発行の都市計画基本図（縮尺1：2,500）「神足」・「納所」・「円明寺」・「淀」を参考にし、作成した。 |
| 8 使用測地系 | 世界測地系 平面直角座標系VI（ただし、単位（m）を省略した） |
| 9 使用標高 | T.P.：東京湾平均海面高度 |
| 10 使用土色名 | 農林水産省農林水産技術会議事務局監修『新版 標準土色帖』に準じた。 |
| 11 遺構番号 | 通し番号を付し、遺構の種類を前に付けた。 |
| 12 遺物番号 | 通し番号を付した。 |
| 13 本書作成 | 金島恵一 |
| 14 備 考 | 上記以外に調査・整理ならびに本書作成には、調査業務職員及び資料業務職員があたった。 |



(調査地点図)

目 次

1. 調査経過	1
2. 位置と環境	3
3. 遺 構	5
(1) 基本層序	5
(2) 江戸時代の遺構	5
4. 遺 物	9
5. ま と め	10

図 版 目 次

図版1	遺構	1	調査区全景（東から）
		2	道路1（東から）
図版2	遺構	1	石列4（南東から）
		2	石列4基底部検出状況（南東から）
		3	溝6（南から）

挿 図 目 次

図1	調査位置図（1：2,500）	1
図2	作業風景（南西から）	2
図3	埋め戻し状況（北西から）	2
図4	周辺調査位置図（1：5,000）	3
図5	調査区北壁断面図（1：80）	6
図6	調査区平面図（1：120）	7
図7	石列4実測図（1：40）	8
図8	石列4底面の瓦敷き（南西から）	8

図9	出土遺物実測図及び拓影（1：4）	9
図10	遺構配置図（1：1,000）	11
図11	現況地形と明治30年地籍図（1：8,000）	12

表 目 次

表1	遺構概要表	5
表2	遺物概要表	9

長岡京左京九条三坊四町跡・ 淀水垂大下津町遺跡・與杼神社旧境内

1. 調査経過（図1）

調査地は、京都市伏見区淀水垂町地内の桂川右岸の河川敷に位置する。遺跡地図では長岡京左京九条三坊四町跡、淀水垂大下津町遺跡、與杼神社旧境内にあっている。

この地において、桂川に架かる宮前橋整備（その3）工事が京都市建設局道路建設課によって計画された。この計画に基づき、京都市文化市民局文化芸術都市推進室文化財保護課（以下「文化財保護課」という）が試掘調査を行ったところ、近世と思われる石列を検出したため発掘調査を実施することとなった。発掘調査は、京都市建設局道路建設部道路建設課から委託を受けた公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所が実施した。

調査区の設定は、文化財保護課の指導により、橋脚から北側へ5mの位置に調査区底端で南北3m、東西27mの計81㎡で行った。調査は12月11日から開始した。重機による表土掘削の後に人力により遺構の検出を行い、検出した江戸時代の遺構の図面・写真による記録作業を行った。この後、さらに下層の遺構の有無を確認するため一部で掘り下げを行ったが、中世の遺物が若干量出土

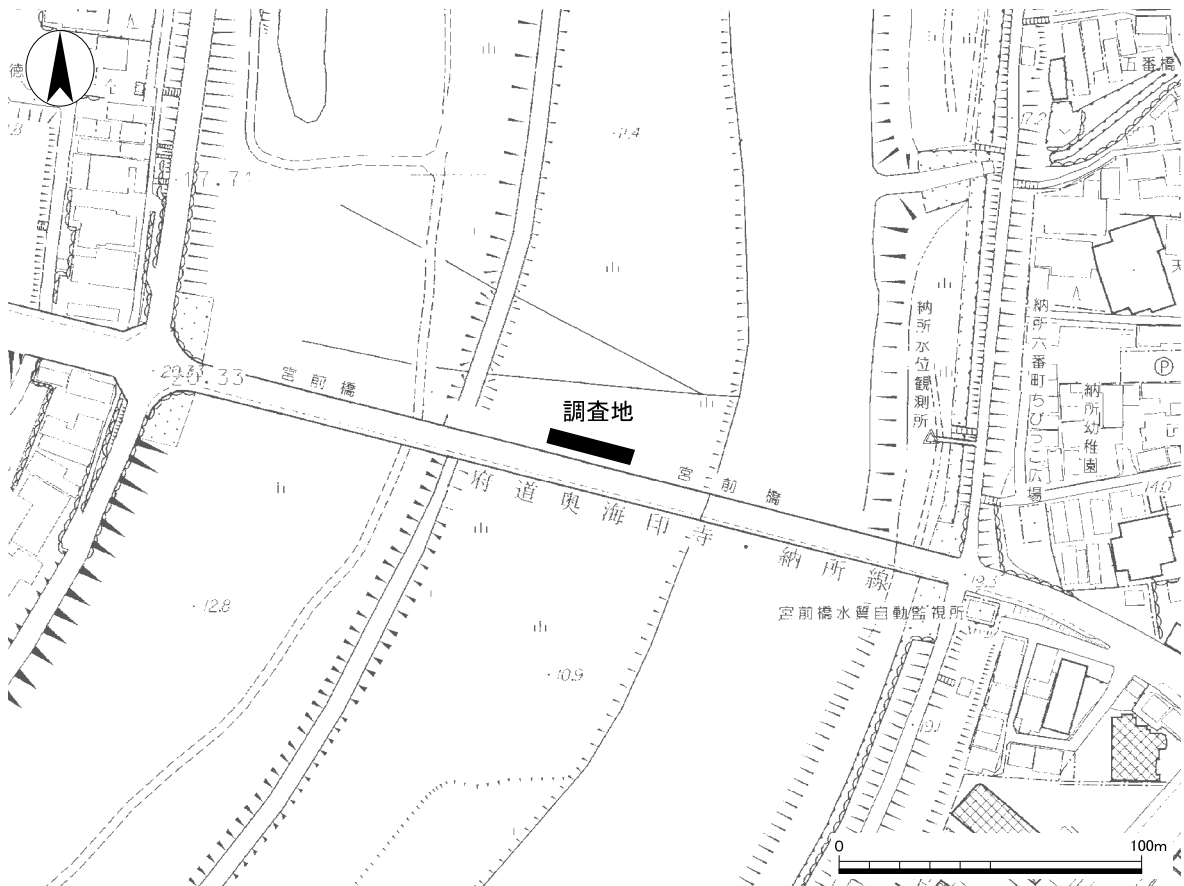


図1 調査位置図（1：2,500）



図2 作業風景（南西から）



図3 埋め戻し状況（北西から）

はしたものの、遺構を確認することはできなかった。これらの調査・記録作業の後、調査区を重機による埋め戻しを行い、12月21日にすべての作業を終了した。

なお、発掘調査中は、文化財保護課及び当財団の調査検証委員である國下多美樹氏（龍谷大学教授）、木立雅朗氏（立命館大学教授）より指導を受けた。

2. 位置と環境

調査地は、現在は桂川右岸の河川敷となっているが、もともとは桂川の堤防であった。明治時代の河川改修工事に伴い、堤防が調査地から約200m西側に築かれた結果、河川敷となったものである。

調査地周辺のこの堤防上には、明治33年（1900）に河川改修工事に伴って移転するまで水垂集落が存在した。水垂集落の成立時期は定かではないが、室町時代の文明8年（1467）の史料には現れている。寛永2年（1625）に淀城が桂川左岸に築城されると、水垂集落は大下津・納所とともに城外町となり、江戸時代を通じて淀川河川交通の拠点として栄えることとなる。集落の性格として



図4 周辺調査位置図（1：5,000）

は、集落の西側に広がる桂川の後背湿地に営まれた水田に拠る農村的な一面²⁾と、桂川に面するその立地から水資源や河川交通と関わりの深い一面とを併せ持っていた。しかし明治時代に入り、鉄道の登場などにより陸路交通が活発になると河川交通は衰退していき、農村としての性格を強めていくこととなる。また、調査地を含めた淀の地は、桂川・宇治川・木津川の3川合流地点に所在しており、洪水などの頻発する地域でもあった。明治時代になると、政府は淀川水系の改修工事を継続的に実施していく。水垂集落は、明治29年（1896）から明治43年（1910）まで行われた「淀川改良工事」に伴い、約200m西側の新たに作られた堤防上に移転することとなった（第1次移転）。與杼神社は、現在淀城跡の一角に鎮座しているが、これはこの第1次移転に伴い遷座したものである。もともとは水垂集落の中にあり、近世には淀6カ町の産土神「淀姫社」として崇拝されており、その位置は桂川右岸の宮前橋付近であった。なお社名は、明治10年（1877）に現在の「與杼神社」に変更されている（以下では混乱を避けるため、「與杼神社」で統一する）。水垂集落は、第1次移転から100年余り経った平成18年（2006）、国土交通省による桂川引堤事業に伴い、さらに西側約100mに移転し（第2次移転³⁾）、現在に至る。

これまで周辺では、試掘調査や詳細分布調査が行われている（図4）。平成24年度に文化財保護課は、宮前橋の南北計9箇所⁴⁾で試掘調査を行い、石列と整地層を検出している。また、平成26年度には桂川の河岸において詳細分布調査が実施され、石積み護岸の構造と遺存状況が確認されている⁵⁾。以上のように周辺調査において若干の遺構は確認されているが、それぞれの成立時期・構造や性格などについては不明な点が多く、今後の課題となっていた。

註

- 1) 「伏見区 水垂村」『史料 京都の歴史16 伏見区』 平凡社 1991年
- 2) 今回の調査地から北西約1.5kmの地点で実施された桂川後背湿地での発掘調査では、平安時代中頃以降から連綿と続く水田遺構を広範囲で検出している。現在の水垂集落周辺の後背湿地に広がる水田も同時期に水田開発が行われた可能性が高い。
『水垂遺跡 長岡京左京六・七条三坊』京都市埋蔵文化財研究所調査報告第17冊 財団法人京都市埋蔵文化財研究所 1998年
- 3) 水垂集落の歴史全般については、以下の文献に拠った。
植村喜博・大邑潤三編『京都南、移転集落水垂の歴史と生活』文理閣 2015年
- 4) 「Ⅵ 調査一覧」No.125・126『京都市内遺跡試掘調査報告』平成24年度 京都市文化市民局 2013年
- 5) 「長岡京左京九条三坊三・四・六町跡・淀水垂大下津町遺跡（14 A 004）」『京都市内遺跡詳細分布調査報告』平成27年度 京都市文化市民局 2016年

3. 遺 構

(1) 基本層序 (図5)

調査地の基本層序を調査区北壁断面のY=-25,956付近を基準として述べる。地表下0.8mまでが現代盛土である。この盛土はやや土壌化した微砂を主としており、現在の宮前橋建設に際して周辺の土を均したものと思われる。地表下0.8~1.2mまでは微砂とシルトの互層で河川堆積層である。地表下1.2mで近世遺構面(22・23層)となる。近世遺構面は灰色シルトなどから形成されており、17世紀前半の土器片や瓦片を含む。これより下層については一部で地表下3.3mまで掘り下げを行い、土中に中世の土師器の小片や炭化物を少量含むことを確認したが、遺構を検出することはできなかった(24~31層)。これらの土は断面観察で水性堆積を示す葉理を認めがたく、人工的な盛土の可能性がある。その場合、近世あるいはそれ以前の桂川右岸の堤防構築土とも考えられる。ただし、この点については調査面積の制約もあり、明らかにすることはできなかった。

以下では江戸時代の遺構について概説する。

(2) 江戸時代の遺構 (図6、図版1)

調査区の中央部で南北方向の石列を伴う道路遺構(道路1)を検出した。遺構面は道路1を境にして東側は20cmほど低くなる。また、道路1構築土の下層では、幅約3mの南北方向の溝6も検出した。

道路1 (図版1) 調査区のほぼ中央部で検出した南北方向の道路。幅約2.4m。路面はよく締まった砂礫混じりの褐色シルトにより構築される。路面の西端を石列4によって、東端を石列5によって路肩としている。石列4・5ともに路面構築土を掘り込んで基底石が据えられている。道路1の構築土からは、17世紀後半の丹波焼播鉢の小片や土師器皿が出土している。

石列4(図7、図版2)は、近世整地層を15cmほど掘り下げて基底石を据え、その上に1~2石の石を積む。積み石の大きさは、大きいもので幅40cm・長さ30~50cm、小さいもので幅10~20cm・長さ20~30cmである。石の不当沈下を防ぐため、基底石の底面には平瓦片を敷き詰めている(図8)。調査区西壁の断面観察の結果、積み石の前後には粘土ブロックを含む黄褐色砂礫をかまぼこ状に盛っていることが確認できる。道路1は、その西肩部に堤状の構造物が存在し、石列4はその端部を土留めする機能を持っていたと考えられる。

石列5も近世整地層を約0.3m掘り下げて石を据えている。遺存状態は不良で、石は基底石の一

表1 遺構概要表

時 代	遺 構	備 考
江戸時代	道路1、溝6	

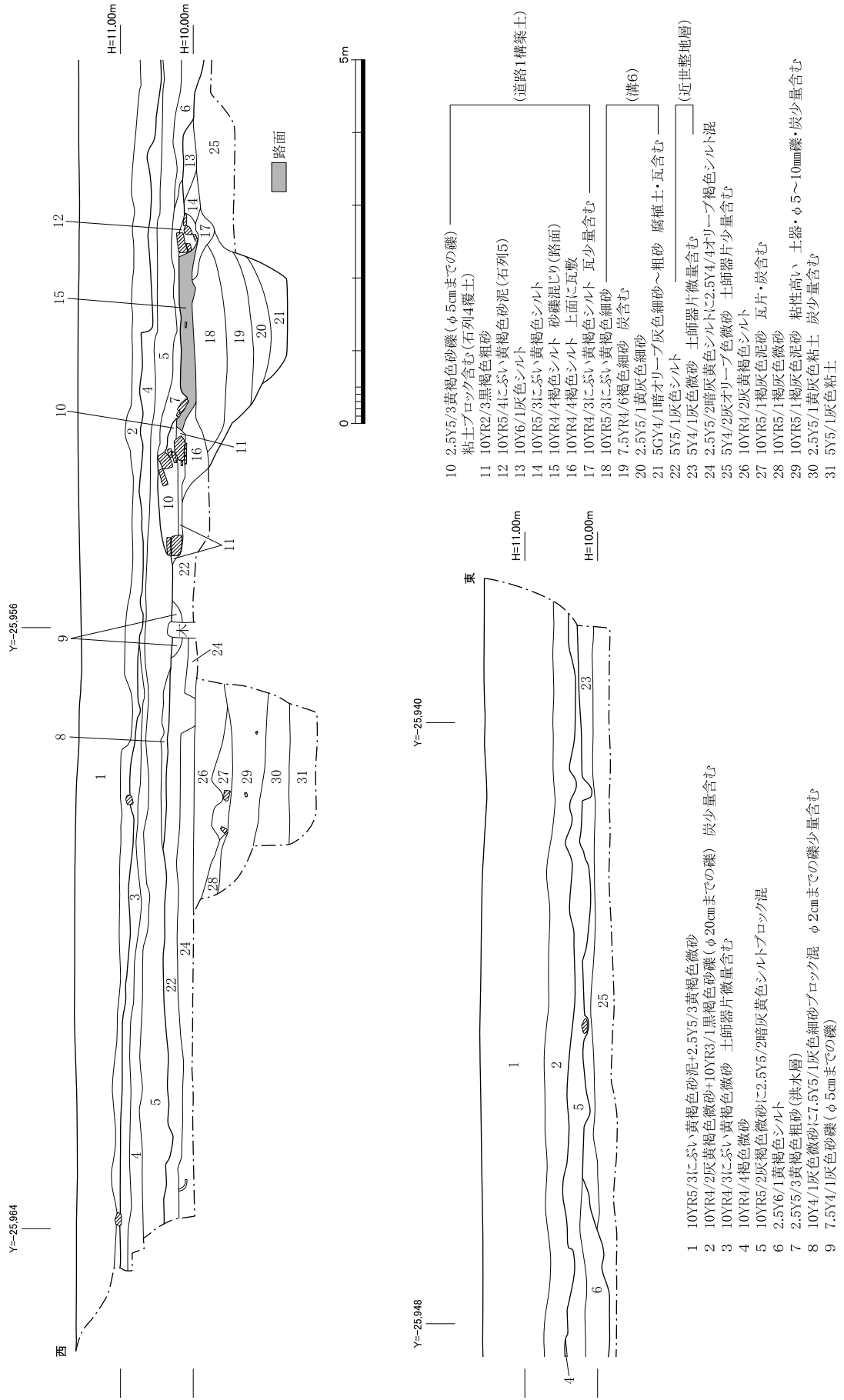


図5 調査区北壁断面図 (1 : 80)

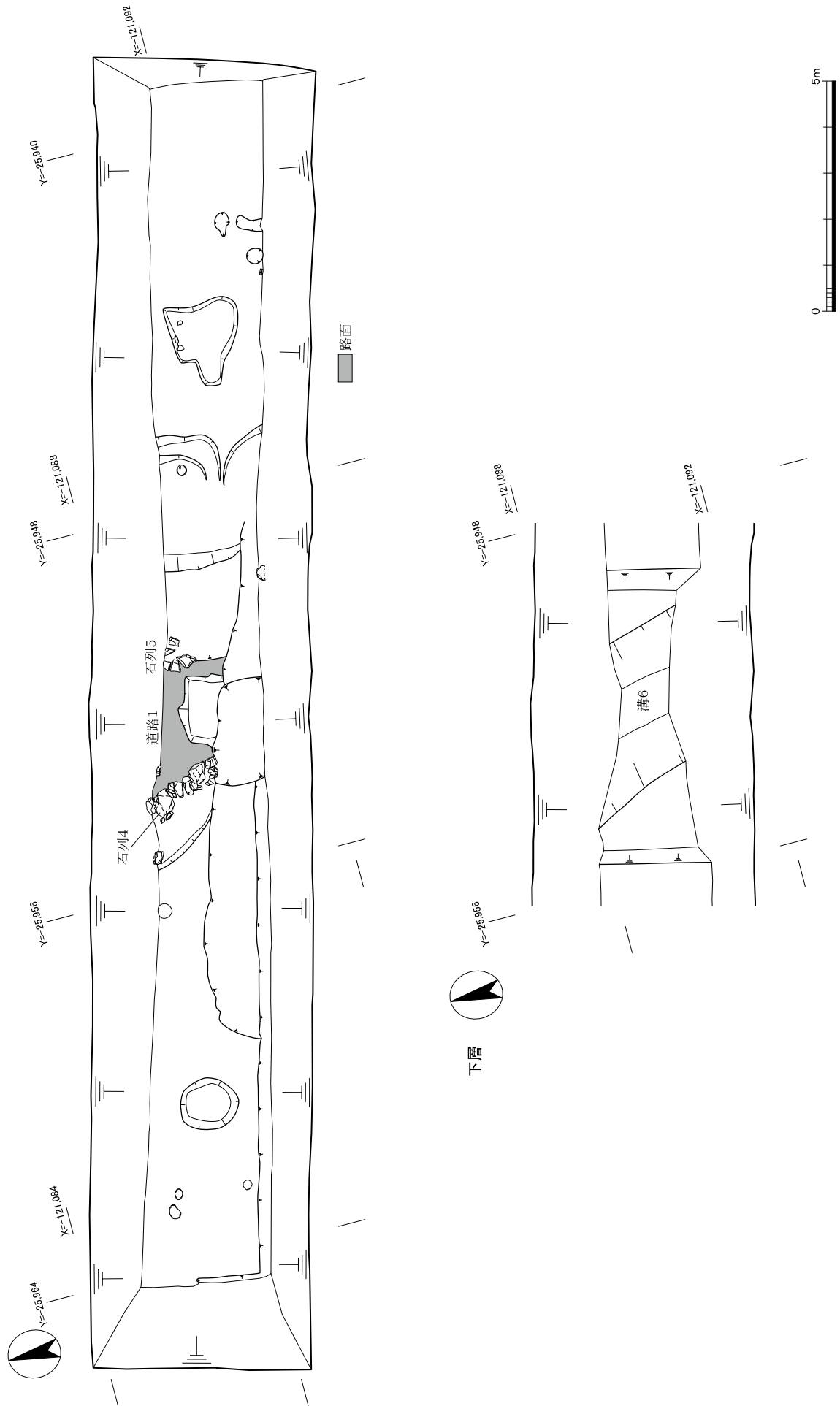


図6 調査区平面図 (1 : 120)

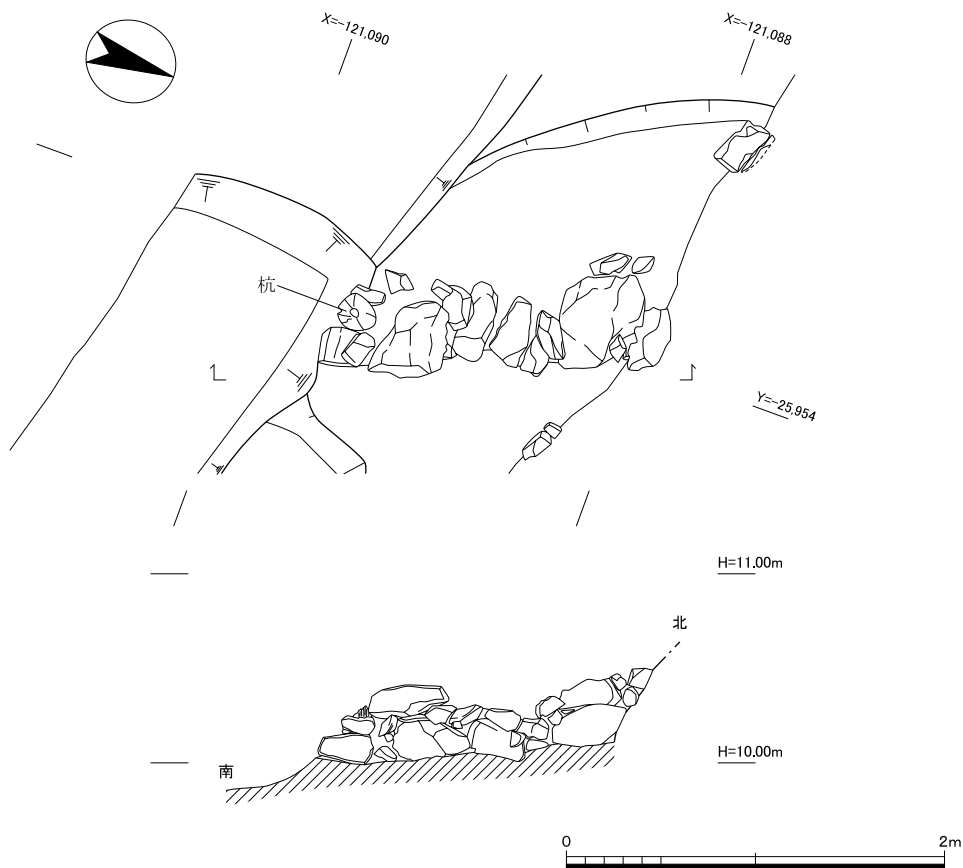


図7 石列4実測図（1：40）

段しかない。本来、この上に積み石が存在した可能性がある。石の大きいもので幅20cm・長さ20～30cmと石列4の石よりも小さい。

なお、石列4の南端部で直径20cm程の杭を確認しているが、近世遺構面よりも上層から打ち込まれていることを確認しており、石列4とは関係はない。周辺住民への聞き取り調査では、調査地付近に木製の宮前橋が存在したとされることから、これと関連する可能性もある。



図8 石列4底面の瓦敷き（南西から）

溝6（図版2） 道路1の構築土下層で検出した南北方向の大溝である。幅約3m、深さ1.2mである。断面形は逆台形を呈する。杭などの護岸施設は認められなかった。溝の埋土は、下層は粗砂、上層は細砂となっており、大雨や洪水に際してほぼ一気に埋没したものと考えられる。埋土からは17世紀前半の丹波焼播鉢の小片が出土している。

4. 遺物

今回の調査では整理コンテナで4箱の遺物が出土した。

出土遺物には、土師器・須恵器・陶磁器・瓦類などがある。時期は、平安時代、中世、江戸時代のものがある。中世の遺物は、主に近世整地層（図5-23層）より下の土層（図5-25層）から土師器が出土しているが、小片のため鎌倉時代か室町時代かは判然としない。瓦類は近世の整地層から若干量が出土した。

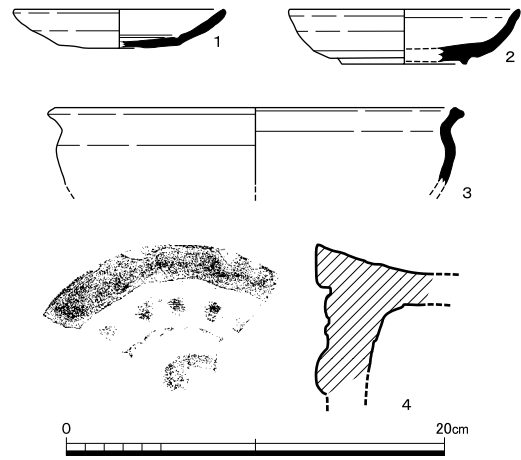


図9 出土遺物実測図及び拓影（1：4）

土器類（図9）

1は土師器皿。内面の圏線は底部から口縁部への屈曲部に明瞭に残る。色調は橙褐色で、胎土は精良である。道路1の路面構築層からの出土である。

2は施釉陶器の皿。白濁色の長石釉を内外面に全面施釉するが、高台端部は拭き取られている。内面底部にピン跡が残る。瀬戸・美濃系。近世整地層（図5-23層）からの出土である。

3は須恵器の鉢。全体に磨滅が激しい。色調は淡灰色で、焼成はやや軟質である。溝6からの出土である。

瓦類（図9）

4は巴文軒丸瓦。珠文間には範傷が明瞭に残る。丸瓦部外面には幅1～1.5cmのヘラ状工具による縦方向のナデが施される。色調は外面が黒灰色、断面が白灰色。焼成はやや軟質である。近世整地層（図5-23層）からの出土である。

表2 遺物概要表

時代	内容	コンテナ箱数	Aランク点数	Bランク箱数	Cランク箱数
平安時代	須恵器		須恵器1点		
鎌倉時代 ～室町時代	土師器				
江戸時代	土師器、施釉陶器、瓦		土師器1点、施釉陶器1点、瓦1点		
合計		5箱	4点（1箱）	0箱	4箱

※ コンテナ箱数の合計は、整理後、Aランクの遺物を抽出したため、出土時より1箱多くなっている。

5. ま と め (図10・11)

今回の調査では、江戸時代前期の幅3m・深さ1.2mの大溝（溝6）、大溝埋没後に上面に構築された道路（道路1）を検出した。いずれも17世紀前半の整地層を成立面としている。これらの遺構の性格について以下にまとめてみたい。

今回の調査では南北方向の道路（道路1）を検出したが、平成24年度の文化財保護課による試掘調査（H24-5区）でも、道路1の延長線上で南北方向の2条の石列を検出している。この石列間の幅は約2mと今回の道路1とほぼ規模が同じであり、これらは水垂集落内に存在した道路遺構であると考えられる。集落の構造を推測する資料として明治30年（1897）の水垂集落の地籍図が残されている。図そのものに若干のひずみがあり、現在の地図と正確に重ね合わせることは困難ではあるが、調査地は凡そ與杼神社境内北側の宅地・耕作地の接点付近となる¹⁾。今回検出した道路はこれらの境界に存在した集落内の南北道路であったと考えられる²⁾。また、この道路1の下層で検出した溝6は、幅3m・深さ1.2mと規模が大きく、集落内の水路としての機能を担っていた可能性がある。溝6は砂によって一気に埋没していることから、大雨や洪水などによりその機能が失われた後、道路として作り替えられたと考えられる。また、平成24年度の試掘調査（H24-7区）で検出された石列は、今回検出した道路1とは石の大きさなどが異なっており、地籍図との位置の比定からも建物の基礎あるいは屋地境と考えられる。

これらの遺構や整地層の時期は、出土した遺物から、近世基盤層の整地が行われたのが17世紀前半、溝6の埋没が17世紀前半、道路1の構築が17世紀後半頃となる。近世の基盤層の整地が行われる時期は、寛永2年（1625）の淀城の築城時期と重なり、淀城外町となった際に水垂集落の整備が行われたと考えられる。

上記のように今回の調査では、水垂集落の整備が淀城築城に際して行われたことが明らかとなった。一方で、これ以前の遺構については確認することができなかった。江戸時代初頭の水垂集落整備に伴いそれ以前のものが失われたのか、今回の掘削深度よりも深い所に遺構面が存在するのか、あるいは中世の水垂集落の位置が今回の調査地とは異なっているのか、このことについては今後の課題である。

註

- 1) 地籍図は下記の論文所収の図を一部修正して用いた。

浅井良亮・大邑潤三・植村善博「京都市淀、水垂・大下津地域における治水・水害史と淀川改良工事」『京都歴史災害研究』第14号 立命館大学歴史都市防災研究所 2013年

- 2) 以下の文献では、平成24年度調査の5区で検出された石列について、與杼神社に関連する遺構の可能性が指摘されていた。

「長岡京左京九条三坊三・四・六町跡・淀水垂大下津町遺跡（14A004）」『京都市内遺跡詳細分布調査報告』平成27年度 京都市文化市民局 2016年

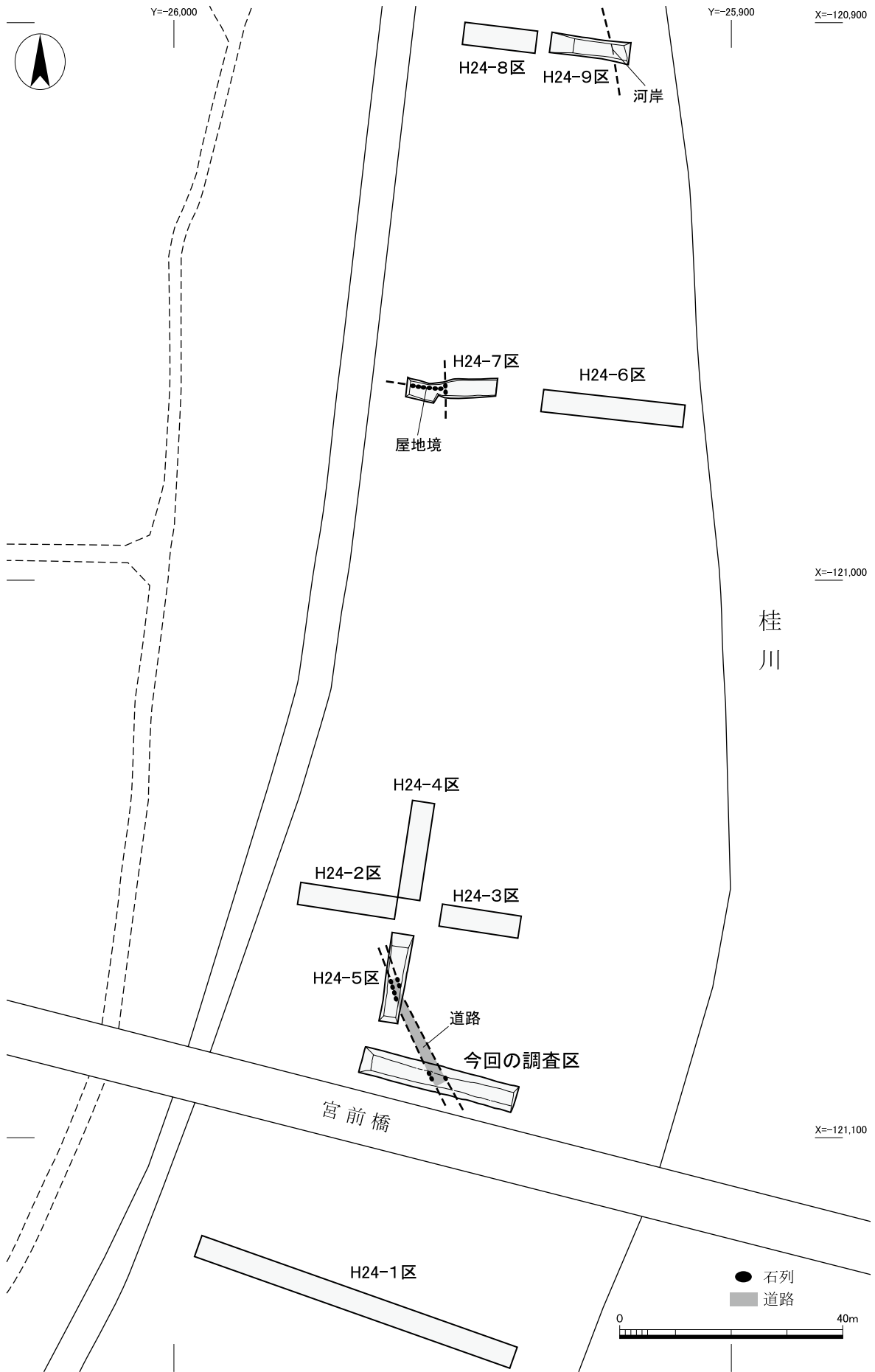


図10 遺構配置図 (1 : 1,000)

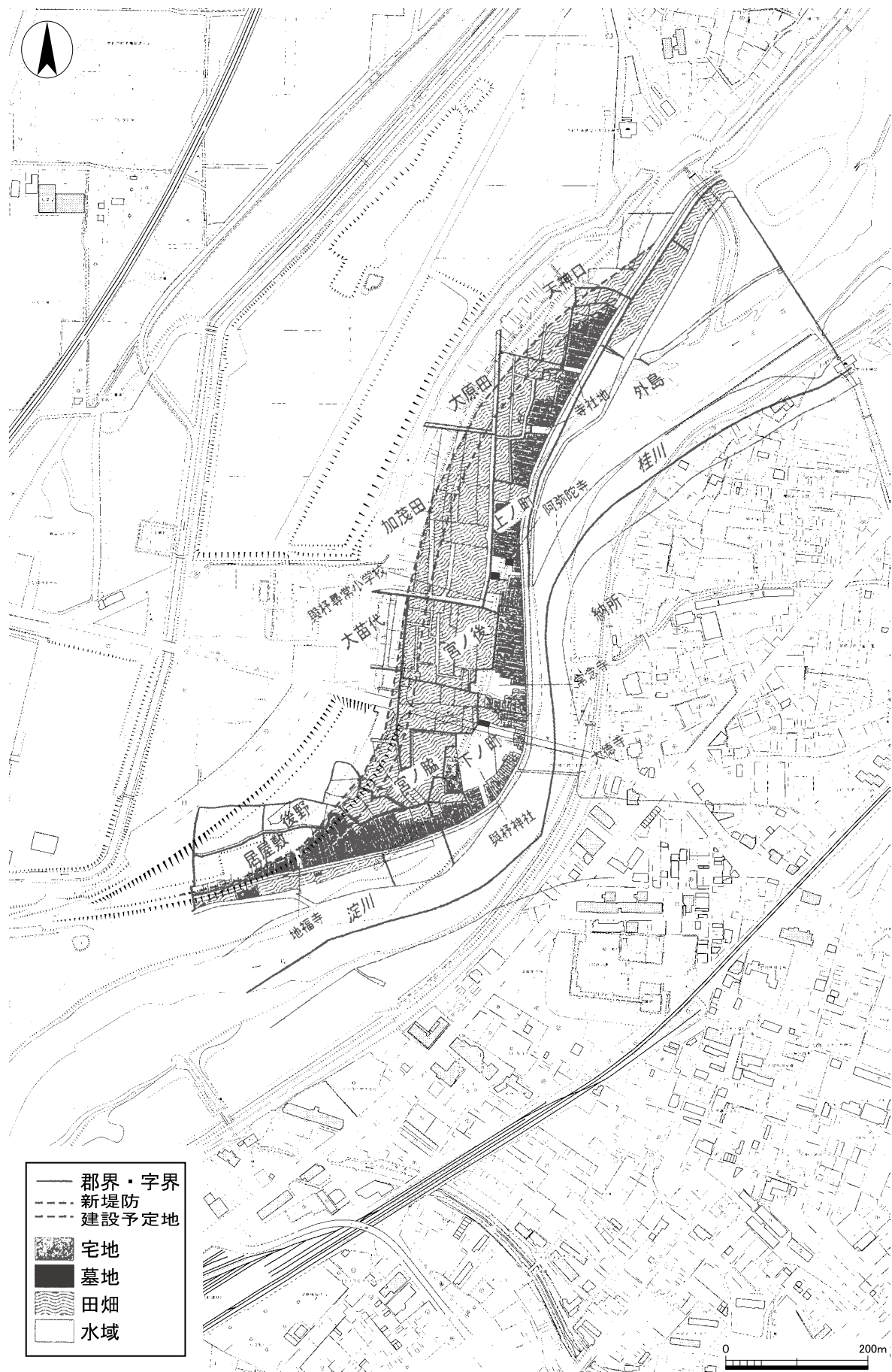


図11 現況地形と明治30年地籍図（1：8,000） ※地籍図は註1文献の所収図を一部改変

圖 版



1 調査区全景（東から）



2 道路1（東から）



1 石列4 (南東から)



2 石列4 基底部検出状況 (南東から)



3 溝6 (南から)

報 告 書 抄 録

ふりがな	ながおかきょうさきょうくじょうさんぼうよんちょうあと・よどみずたれおおしもづちょういせき・よどじんじゃきゅうけいだい							
書名	長岡京左京九条三坊四町跡・淀水垂大下津町遺跡・與杼神社旧境内							
シリーズ名	京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告							
シリーズ番号	2017-9							
編著者名	金島恵一							
編集機関	公益財団法人 京都市埋蔵文化財研究所							
所在地	京都市上京区今出川通大宮東入元伊佐町265番地の1							
発行所	公益財団法人 京都市埋蔵文化財研究所							
発行年月日	西暦2018年3月30日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
ながおかきょうあと 長岡京跡	きょうとしふしみく 京都市伏見区	26100	3	34度	135度	2017年12月 11日～2017 年12月21日	81m ²	橋脚補強 工事
よどみずたれおおしもづちょう 淀水垂大下津町	よどみずたれちやうちない 淀水垂町地内		1214	54分	42分			
いせき 遺跡			1215	29秒	58秒			
よどじんじゃきゅうけいだい 與杼神社旧境内								
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
長岡京跡	都城跡	江戸時代	道路、溝		土師器、施釉陶器、瓦		淀城の城外町である水垂集落が、築城に際して整備されていることが判明した。	
淀水垂大下津町遺跡	集落跡							
與杼神社旧境内	神社跡							

京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2017-9

長岡京左京九条三坊四町跡・
淀水垂大下津町遺跡・與杼神社旧境内

発行日 2018年3月30日

編集行 公益財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

住所 京都市上京区今出川通大宮東入元伊佐町265番地の1
〒602-8435 TEL 075-415-0521
<http://www.kyoto-arc.or.jp/>

印刷 三星商事印刷株式会社

住所 京都市中京区新町通竹屋町下る弁財天町298番地
〒604-0093 TEL 075-256-0961